

SPELT

January 2017 Vol.5 No.2

実用英語教育学会

NEWSLETTER

目次

巻頭言「[第5回研究会を終えて](#)」

釣 晴彦（実用英語教育学会会長）

第5回研究会について

講演

「[ALTとJTEと一緒に教える授業で効果的なチームティーチングを実現するための方略](#)」

佐藤 ケイト（札幌学院大学 講師）

発表

「[幼稚園における早期英語教育導入時のALTの役割について](#)」

山崎 秀樹（北海道千歳高等学校 教諭）

フォーラム

「[ALTと日本人教員の協力と協働の質的向上を目指して](#)」

パネリスト： 佐藤ケイト(大学・高校代表)

平澤健一(小学校代表)

Ian McMurray(中学校代表)

山崎秀樹(高校代表)

進行役： 三浦寛子(北海道科学大学)

シリーズ「[小学校からはじまる実用英語教育](#)」

第10回： ほめる・頼む・感謝する・同情する—その(1) ほめる

久野寛之（札幌大谷大学 教授）

お知らせ

巻頭言

実用英語教育学会 第5回研究会を終えて

実用英語教育学会会長 釣 晴彦
札幌学院大学人文学部 教授

実用英語教育学会も第5回研究会を終えました。ニュースレター発行に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

今回の研究会は「ALTとJTEと一緒に教える授業で効果的なチームティーチングを実現するための方略」(Strategies for Successful Team Teaching with ALTs & JTEs in the Japanese Classroom)という題で、札幌学院大学人文学部英語英米文学科の講師である佐藤ケイト先生に基調講演をして頂きました。

佐藤ケイト先生は20年以上日本に住まわれており、最初は高校、そして中学校、現在は大学で教鞭を執り、同時に小学校英語活動の講義も担当なさっています。幼児教育にも関わりを持ってこられたので、日本の幼児から大学生まで、実に様々な学習者の英語活動や英語教育に関してかなりの経験を重ねてこられたことになります。チームティーチング(以下TT)と言えば、個人的な話になりますが、私が室蘭清水丘高校の教諭の時、初めて日本にALTとして赴任してこられ、私とTTの経験をしたのがケイト先生でした。その後縁あって、現在大学でも週一コマの講義を実験的にケイト先生とTTを取り入れて行っています。

ALTとJTE間の諸問題の根本的な解決には互いの文化の理解が不可欠だというメッセージを私たちは受け取りました。講話を英語ではなくて日本語でなされたのには驚かされましたが、そのことに象徴されるように、日本の文化を良く理解して研究しておられるので、今後もこの分野で一層活躍されることを願っています。

続く研究発表は、北海道千歳高等学校教諭の山崎秀樹先生の「幼稚園における早期英語教育導入時のALTの役割について」でした。幼稚園教育が目指す5領域(健康、人間関係、環境、

言葉、表現)を伸ばす活動にALTがどのような効果をもたらすかという観点からの考察です。山崎先生は、常に教育を実用的な視点から実践的に分析しておられ、その旺盛な研究心には敬服の至りです。職員や保護者などからのインタビュー調査も含まれ、まだ経過報告ですが、今後のまとめが大変期待されます。というのも、この研究には、元高校のALTだった奥様が幼稚園でのALTとして関わっておられます。夫妻の連携による協働研究によって分析過程に緻密さが増し、貴重な研究結果が出ることでしょう。

最後のフォーラムでは、「ALTと日本人教員の協力と協働の質的向上を目指して」と題して、平澤健一先生、Ian McMurray先生、山崎秀樹先生、佐藤ケイト先生の順でパネリストが小中高大の各現場の現状を報告し、フロアとの応答の後、今後の解決の方向性をご提案頂きながら議論を終えました。特に平澤先生やMcMurray先生からは詳細な資料が示され、現場の今の状況を正確に理解することができて大変参考になりました。時間の制約のためにまだまだ論じ足りない視点がありました。次の機会に期待します。

今回の研究会のテーマは、なかなか焦点を絞り研修することが難しいと言われていました。しかし、短い時間ながら、内容のある研修ができたと確信しております。研究会後の茶話会でも、参加された皆さんが、時間を忘れて熱心に交流し、情報交換をしておられました。

この学会は、活動を広く共有できる方々に発信し、多様な角度から手法をさらにシェアして共に学んで歩んで行きたいと考えております。

今後とも一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第5回研究会について

2016年11月5日(土)、札幌大谷大学セレスタ札幌キャンパスにおいて第5回研究会が開催されました。小・中・高・大学をはじめ英語教育に関わる方が大勢参加してくださいました。研究会は、26年前に高校ALTとして初来日して以来、年少者から大学生に至る幅広い日本人学習者に英語を教えてきた経験に基づく洞察力と示唆に富んだ佐藤ケイト氏(札幌学院大学)の講演で始まりました。それから、山崎秀樹先生(北海道千歳高等学校)の幼稚園ALTに関する興味深い調査研究の中間報告を聞いた後、三浦寛子先生(北海道科学大学)の司会進行でフォーラムの時間を持ちました。テーマは「ALTと日本人教員の協力と協働の質的向上を目指して」。大学代表として講演者の佐藤先生、高校代表として研究発表をいただいた山崎秀樹先生、中学校の代表及びALT側の見解の代弁者として、札幌市の中学校ALTイアン・マックマレー氏、そして、小学校代表として平澤健一先生(札幌市立平岡南小学校)をパネリストにお迎えして、ALTの現状とこれからの展望について貴重な情報と意見の交換をすることができました。その後、巻頭言にもあった通り、お茶とお菓子をつまみながら、今回の研究会のテーマについてさらに突っ込んだ意見交流ができたと思います。

今回は、講演、研究発表及びフォーラムの内容をまとめてお届けいたします。事情で参加できなかった皆様のご参考になれば幸いです。

<基調講演(日本語)>

「ALTとJTEと一緒に教える授業で効果的なチームティーチングを実現するための方略」(Strategies for Successful Team Teaching with ALTs & JTEs in the Japanese Classroom)

佐藤 ケイト (札幌学院大学 講師)

チーム・ティーチングとは何か

ALTとJTEと一緒に授業を教える際には、様々な課題があります。例えば、ALTの中には日本人の教員(HRT)が積極的に授業に関わってくれないと不満を抱えている場合があります。一方で、HRTの側も授業の準備の時間が十分にとれないことや、自身の英語力の不十分さについて問題を感じている場合があります。このような問題の原因としては、互いの文化や視点の違い、英語教員として経験してきたトレーニングの違いなどがあります。

日々の仕事量の多さにプレッシャーを感じているHRTと、仕事に不満を持つALTがチームティーチングをする中では、様々な問題が生じます。そ

れらを解決するための鍵の一つは、チームティーチングとは何を指すかを考えることです。Risko & Bromley (2001)は、チームティーチングを教員たちが「共通の目標に向かって一緒に教えるということに同意することである」と説明しています。言い換えれば、チームティーチングとは、「協力するティーチング」、「コラボレーションのティーチング」、「並行したティーチング」、「パートナーシップによるティーチング」であると言えます。特に、パートナーシップ・ティーチングは、「学生のニーズに応えるために、全ての教員が責任を分け合う。カリキュラムを組むためにも、授業計画、授業、評価に全ての教員が関わるべきである。そのような関わり方が教員全員の成長につながる。」

という考え方に基づいています。

チーム・ティーチングのいろいろな形

チームティーチングの形態や考え方としては、いくつか挙げられます。例えば、「1つのクラスで教員がそれぞれ異なる役割を果たす」、「クラスを半分に分けて別の教室でそれぞれの教員が教え、途中で生徒を入れ替える」、「教員が交代しながらクラスを教える」、「教員が各クラスで生徒を入れ替えながら授業をする」、「教員が同じクラスにしながら、一つの共通した目標を達成するために最もやりやすい方法で教える」などです。

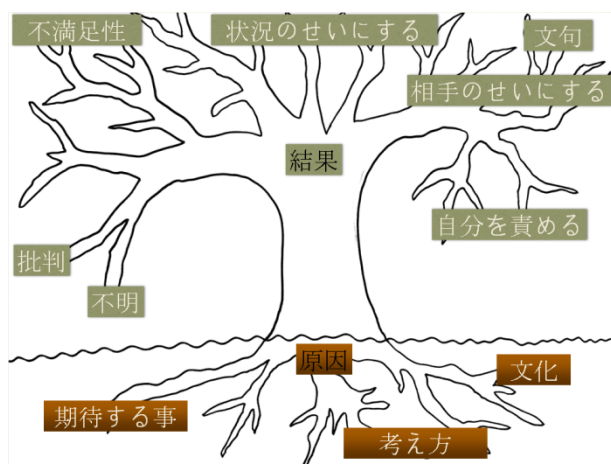
効果的なチーム・ティーチングを阻む根本原因

ただ、ALTとJTEがチームティーチングをする際には、先に述べたように文化の違いをはじめとして、授業に対する準備状態の温度差や、言葉の壁、それまでに経験したチームティーチングでの悪い思い出の影響などがあります。そのために、なかなかすぐに良いチームティーチングを行うことができないのです。チームティーチングを妨げる要因の一つである文化の違いの例として、西洋と日本の行動面での相違があります。西洋では、リスクを恐れない傾向があり、短期で達成できる目標に焦点をあてて行動しやすい面があります。一方日本では、リスクよりも安全を優先させる傾向があり、長期的な視野で行動することが多くみられます。こういった違いがある中で、ALTとJTEの人間関係が希薄なままだと、「各教員が何をすべきか」「役割が何であるか」「誰にどんな責任/義務があるのか」について、互いが異なる期待を持つことになり、チームとして努力することに消極的になってしまう恐れがあります。

問題の解決に向けて

このような問題を解決するためには、個人レベルでの人間関係づくりを進めながら、共通の目標を明確にしていく必要があります。共通の目標、つ

まり授業で「何を教えているのか」ということを確認すべきです。共通の目標を持ち明確な役割分担をする中で、ALTとHRTそれぞれにしかできない役割があることを理解し、お互いに尊敬しあうことが大切です。何か改善できる点があれば話し合う、などしっかりコミュニケーションをとり、互いに助け合うように努力していくことで、チームティーチングの妨げとなっていた問題を克服することが可能になります。



[講演者の許可を得て掲載しています]

枝葉でなく、根を見る

チームティーチングの問題として、お互いに不平不満や批判を述べたり、状況のせいにしたたり、自分を責めたりといったことがあると思います。しかし、それらのことは、一本の木に例えて言えば葉の部分なのです。そういった葉（結果）が育つ根っこ（原因）には、先に述べたように文化や考え方、互いに期待することの相違があるのです。チームティーチングを成功させるためには、葉ではなくその根っこの部分を考えなければなりません。文化や考え方の違いがあることを、コミュニケーションをとることで理解し、相手も人間でありミスをするかもしれないとお互いを認め合い、何を授業で教えるのかという目標に焦点を置いて行動することが大切なのです。

(文責: 編集委員)

<研究発表>

発表：「幼稚園における早期英語教育導入時の ALT の役割について」

～3 人の常駐 ALT による幼稚園の早期英語教育の導入は、将来に向けた園の持続可能かつ効果的なカリキュラム・メソッド・マネジメントにどう影響するか～

山崎 秀樹（北海道千歳高等学校 教諭）

本研究会のテーマである、「ALT と日本人教員の協力と協働の質的向上を目指して」の下、私が現在大学院にて研究している、早期英語教育における ALT の導入の効果の研究について、経過報告として発表した。

恵庭市の E 幼稚園は今年度、それまで全く行っていなかった英語教育を導入した。ユニークなのは、寺院が運営する私立の一幼稚園が独自に英語教育を導入することを決め、3 人の ALT を雇用し、全ての園児に対して英語教育を導入することを決めたことと、英語教育の専門家が不在の中、ALT が中心となって実践を重ねつつ、独自のカリキュラムや指導内容、メソッドをスタッフ自身が作り上げる過程を経験する点である。ALT3 人が、月曜日から金曜日まで、園児がいる時間帯に常駐、朝のバス登園から、森の野外活動の時間など、この幼稚園の特色ある活動を保ちつつ英語教育を実践している。



記事内の写真は全てイメージです(編集委員)

同園の英語教育には、運営協力を行う保護者として、英語教育を研究する学生として関わることを園から承認

いただいている。リサーチ方法としては、質問紙、面接、観察を行い、長期的に園関係者と関わって調査するエスノグラフィックアプローチを取ることにした。これまで、導入時の期待を測るアンケート、導入半年後の園児の英語の習得状況や保護者の意識調査のためのアンケートを、保護者に向けて計 2 回実施した。また、園長やスタッフ、ALT とのインタビュー面談、授業での園児の観察などを行うなど、アンケートで量的なデータ、インタビューや観察などで質的なデータを収集している。現時点では、保護者の期待は非常に大きく、半年後の子どもの英語の使用も確実に増えている。さらに、園のマネジメントが ALT と経営陣・日本人スタッフの協働に大きくプラスの影響を及ぼしていることが見えてきており、そこから、早期英語教育における ALT の関わり、マネジメント等の多くの示唆が得られるのではないかと期待する。今回は、同幼稚園の 4 月の導入時からの実践について、保護者アンケートや面接、観察などを通して、現在までの成果や現状を報告し、ALT の活動、スタッフとの関わり、カリキュラムやメソッドの策定や、園児の英語力の向上を調査し、早期英語教育のマネジメントへの課題を探ることを目的として報告した。

<フォーラム>

「ALT と日本人教員の協力と協働の質的向上を目指して」

パネリスト (敬称略)

佐藤ケイト(大学・高校)、平澤健一(小学校)、Ian McMurray(中学校)、山崎秀樹(高校)

進行役 (敬称略)

三浦寛子 (北海道科学大学)

チームティーチングでは「教員たちが共通の目標 に向かって一緒に教えるということに同意する」

それがチームティーチング (以下 TT) の大前提となるという基調講演での佐藤ケイト氏の説明を再確認しながら、そのような TT を阻む現状を小中高大の代表から報告してもらい、その後、その問題の解決に向けて具体的にどのような取り組みが可能なのかを探っていきました。

英語のできる人がいる中・高

高等学校では、英語のできる JTE の先生たちが ALT と適度にコミュニケーションを取りながら、JTE その他の先生たちと馴染めるように努力しているようすが報告されました。また、ALT に授業内での活動以外にやってもらっていることとして、「英検の面接対策、国際交流事業でのサポート、教材作成、リスニング教材作成、新聞記事・ニュース映像の検索、簡単な文にリライト、オーラルイントロダクションの作成、プレゼンテーションやスピーチの添削と指導、英語部のプレゼンテーション・ディベート指導、ハロウィン・クリスマスなどの文化紹介」などがあるという山崎先生の報告を聞いた高校の先生からは、「JTE である私自身の側に遠慮があったかもしれません。高校の ALT がもっと活躍できる場面を作ろうと思います。」というような反応がありました。

英語のできる人がほとんどいない小学校との違い

それを受けて、佐藤ケイト先生から、そんな風に『これこれをしてください』と、JTE の方から積極的に言ってもらうことが大切だというコメントがあったのですが、それに対して、平澤先生か

らは、「小学校には、『これこれをしてください』と言える人がなかなかいない。それが大きな課題です。」という応答がありました。その意味で、この報告では、フォーラムで見えてきた小学校での現状や課題を中心に報告することにします。

「札幌 ALT 問題」

2016 年 5 月、札幌市の小・中学校では、新学期開始時になって、ALT 問題なるものが起き、大きな話題となりました。



札幌市では、小学校に配置されている全 ALT (外国語指導助手) 18 名と、中学校 ALT の全 69 名中約 7 割 (68%) にあたる 47 名が民間委託の ALT です (2016 年度)。その 47 名の 4 割弱にあたる 20 名もの派遣予定者が業者との契約を辞退し、5 月から予定されていた英語 ALT の派遣が中止となったという問題です。いつまたそのような事態が起こってもおかしくない雇用形態は、それ自体が大きな問題で、市議会でも取り上げられていることが資料を通して報告されました。また、派遣が再開されても、小中学校の教員にとっては、もう一つの大問題が日常的に生じていることが報告されました。

「札幌 ALT 問題」と小・中学校での外国語活動

文部科学省 (以下文科省) の JET プログラムを通して各自治体に直接雇用されている ALT は「JET ALT」、民間委託によって雇用されている ALT は「Non-JET ALT」と呼んで区別されています。直接雇用の JET ALT の場合は、配置され

た学校の管理職や担任教員から指導に関する指示や要望を聞いて、その場で対応することができます。ところが、Non-JET ALT の場合は、その場での対応ということが許されておらず¹、指示や要望は全て所定の電子フォーム（メニューから該当項目を選択する仕様のエクセルファイル）で事前に連絡し、形式上、派遣業者からの指示に従うという手続きにしておかなければなりません。その様式への記入は日本語で入力是可以していますが、言えることが限られていて、指示や要望を出す側にとっても、受け取る ALT 側にとっても指示や要望の伝達手段としては大変不便かつ不十分なものになっているようです。

実際、フォーラムに提出された資料の中にある某中学校の管理職の話では、このフォームによる主な連絡内容は、英語の具体的な授業内容についてと言うよりは、行事予定に応じて何月何日に来てもらい、その日の何時に帰ってもらうといった勤務時間等の連絡を選択肢を選んで伝えることがほとんどだったといえます。一方、要望や指示を受け取る側の派遣英語教師の声を代弁して、札幌市の中学で教える McMurray 氏は、教科書の何ページをやってほしいというだけでは、子どもたちにとって本当に役立つ授業はできない。その日までに、どんな語彙や文法がわかるようになっているのか、導入なのか復習なのか、といった基本的で重要な情報が何としても欲しいと、送られてくる情報内容の改善を訴えていました。

TT を阻む制度的な壁

民間委託の Non-JET ALT は、文科省と厚労省の合意で、教科書の会話を読む又は実演して見せるところまでは一緒に授業ができますが、それ以上のことを同一教室内で JTE と Non-JET ALT が一緒に行うことは認められていません。このことが Non-JET ALT が配置されている小学校で持つ意味は何でしょう。それは、「教科」でないために教科書というものすら存在しない小学校「外国語

（英語）活動」では、ALT と担任教員との TT を云々する以前に、そもそも制度上、ほぼ自動的に「ALT お任せ型」の授業にならざるをえない状況が存在するというところにほかなりません。小学校の「外国語活動」が「英語」として教科化される 2020 年までには、この民間委託方式が解消され、ALT と JTE の TT を阻むこのような制度上の壁が取り除かれることが望まれます。



訪問頻度とコミュニケーション

札幌市の教育委員会によると、ALT の訪問は、小学校では「年間 35 週のうち最低でも 8 回程度」つまり毎月 1 回程度、中学校では「学校規模に応じて週 1 回」だそうです。他の自治体では、中学校でも 3 か月に 1 回程度しか ALT が来ないところもあるということがフォーラムでの意見交換を通してわかりました。ALT と JTE の効果的な TT を実現するためには、お互いの考え方や行動の根本にある文化を理解しながら、個人レベルでのコミュニケーションから始めることがいかに重要かを佐藤ケイト氏の講演を通して学びました。しかし、同じ職員室の隣の席に座っていても、指導上の指示や要望を伝えることができなかつたり、ALT とゆっくり話をしたいのに、契約のために、一定の時間になると学校を後にしなければならなかつたりする。そして、来校頻度が低くなると、「月に一度しか来ない珍しいゲスト...面倒くさい。ティーチングスタイルが違う...揃えるのは面倒くさい。ティーチングプランを作るのが...面倒くさい。」という悪循環が始まる。こうした《高いハードル》を一人一人が乗り越える努力をすることは、英語のできる JTE には比較的容易かもしれませんが、英語の不得手な小学校の担任教員には大変です。小学校の教員にも、もっと楽で簡単にできる効果的な ALT の活用の仕方、活躍のしてもらいたい方はないのでしょうか。次のテーマが見えてきました。（文責：編集委員）

¹ 文科省のウェブサイト「労働者派遣事業の概要等」という「厚生労働省職業安定局需給調整事業課労働者派遣事業係」で作成した文書が掲載されています(2016年12月閲覧)。
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304118_1.pdf

第10回 「ほめる・頼む・感謝する・同情する」—その(1) ほめる

「ほめる」がなぜ「小学校からはじまる実用英語」？

もう十数年前のことです。アメリカで12年日本語を教えて帰国し、日本の大学の語学系学部で英語教育に関わり出した頃のことです。2年生の夏にオーストラリアでの5週間の語学研修に行った学生の一人に「どうだった」と声をかけると、開口一番「ホストファミリーに海に連れて行ってもらった時、“Great!”と“Beautiful!”しか言えなくて情けなかった」という答えが返ってきたのをいまだによく覚えています。「すごい！」が言えなくて悩んでいる学生がいることに驚くとともに、そういうニーズに気がつかなかったことを猛省したものです。

以後、驚きと感動を表す表現方法を学生に教えることは私の指導の大事な一部となっています。指導する際、はじめに必ず聞くことがあります。素晴らしい人やものに出会ったときに、どんな言い方でその素晴らしさをほめるかという質問です。皆さんは、いかがですか。実を言うと、“Very good!”と“Great!”と“Wonderful!”以外の表現を挙げられる学生はきわめて少数派なのです。最初の驚きから十数年を経て、職場が変わり、教える学生も語学系から非語学系専攻に変わりましたが、学生の答えにはあまり変わりがありません。つまり、それだけ一様にほめ方というものを知らないということです。それは、中学や高校で教えていないからでしょうか？いえ、勿論教えているはずですが、でも、色々な事情から、「ほめる」が死角の一つにならざるを得ない状況にあるのでは？それで、小学校から…というわけです。

「ほめる」ができないのには理由がある？

いくつもあるほめ方の中でも最もインパクトの強い効果的な方法の一つに感嘆文というのがあります。

- | | |
|-------|--|
| 第1回： | ○と× |
| 第2回： | 数と数字 |
| 第3回： | アルファベット |
| 第4回： | “Nice to meet you.”と“Good to see you.” |
| 第5回： | “Excuse me.”と“I’m sorry.” |
| 第6回： | “Sir”と“Ma’am” |
| 第7回： | “Uh-huh”・“Uh-uh”・“Uh-oh” |
| 第8回： | “Yes”は“Yes”, “No”は“No” (1) |
| 第9回： | “Yes”は“Yes”, “No”は“No” (2) |
| 第10回： | ほめる・頼む・感謝する・同情する |

眼前に広がる海や山を見て、また、高層ビルや山の頂から下界を見下ろして、その景色に圧倒されたとき、“Oh, what a view!”と言うだけで、“great”だの“awesome”だのといった言葉では表現できない、とても強い感動を伝えることができます。日本語でも、「とっても素晴らしいですね」と言うより、「何て素晴らしいんでしょう」と言う方がインパクトがあるのと同じです。「何て」ということばには、そういう「筆舌に尽くしがたい」というニュアンスが込められていますし、そういう特別な形を使うことによって、「この感情は特別なものだ」ということを明示することができるのです。ところが、今の学生たちは、この感嘆文という表現形式に対する馴染みがとても薄いように思います。なぜでしょう。

筆者のように50歳以上の方なら、中学校で「感嘆文」というのを習ったはずですが、“It’s a very beautiful flower.”を“What a beautiful flower it is!”と書き換えるというのは、高校入試の定番問題で、感嘆文を知らない学生はいないくらいでした。ところが、今の中学校では必ずしも感嘆文を教えません。感嘆文でなくても言い方一つで感嘆の気持ちを伝えることができるという考え方に基づく方針転換です。

今から半世紀近く前の昭和44年改訂(中学校)と45年改訂(高等学校)の指導要領には、「中学校2学年 ア 聞くこと、話すこと (ア) 感嘆した気持ちを言い表し、聞くこと」、「高等学校『英語B』ア 聞くこと、話すこと (オ) 感嘆した気持ちを言い表し、聞くこと」と、「感嘆」という言葉が明記されていました。ところが、昭和52年改訂(中学校)と53年改訂(高等学校)の指導要領で、この「感嘆」という言葉は消えます。平成元年の中学校指導要領でも、英語にはありません。同じ指導要領のドイツ語のセクションには、英語に準じた目標を達成するために選べる学習項目として「別表3 言語材料 イ 文 (オ) 感嘆文」が挙げられているのに。また、平成20年の中学校指導要領でも、やはり「感嘆文」という言葉は出てきませんが、「言語の働き b. 気持ちを伝える」の中に「ほめる」が含まれていて、その「表現例」の一つに“What a nice dress!”といういわゆる感嘆文が挙げられています。

このように、今の指導要領では、「ほめる」や「驚く」という言語機能を表す言葉はあっても、「感嘆文」という文構造を特定する言葉はありません。「感嘆文」のような言語の構造を教えるのではなく、「ほめる」という「言語の働き」を教えることが言語教育で最重視されるようになった結果です。それ自体は大変歓迎すべきことです。しかし、それが実際の、実用的観点から教育上効果的かという、甚だ疑問です。

感嘆文が言えなくても感嘆は表現できる？

最近インターネット上で見つけた記事に、「最近の中学の教科書を見ると、How と What を使った感嘆文は、英文中には出てくるものの、文法の習得目的になっていなくて、基本例文も挙げられていないことが多いように思われます。(全ての教科書を点検したわけではないので、あしからず。) 多分、「会話文では主語と動詞付きの完全な文形式の感嘆文はあまり使われない」という事実を反映しているのでしょう。そのせいか、高校生になっても感嘆文がよくわかっていない人が多いので、この際ここで復習してマスターしてしましましょう。」² (太字筆者) とありま

² サイト名「ゼロからの高校英語 英志館道場」の「中学英語・ちょっと復習-感嘆文 その1」(2016年12月20日閲覧) <http://eishikandojo.jp/blog-entry-191.html>

した。実際に、検定教科書を出版している6社のH28年度版中学校英語教科書の年間指導計画書や指導・学習内容一覧をざっと調べてみましたが、そのうちのわずか1社の2年生の教科書に“What a lot of CDs!”という表現が「慣用句」として登場してくるくらいで、他には見当たりませんでした。残念ながら、この連載記事を書く前に、英語で「ほめる」・「驚く」方法が各教科書でどんなふうに提示されているのかを丹念に調べる暇はありませんでした。でも、いわゆる感嘆文という表現形式が使われていないというのはどうやら事実のようです。

なぜ教科書で教えない?—難しいから? それとも、その効果がわかっていないから? それとも、「ほめること」自体の大切さをわかっていないから?

「ほめる」というのは、社会学者マズローの言う人間の5つの基本的欲求のうち、最上位から2番目に位置する重要な欲求、「尊厳欲求(承認欲求)」を満たすきわめて大切な働きです。日本の文化では従来最も軽視されてきた部分ですし、間違ったほめ方が問題になる時期もありましたが、いまや、適切に「ほめる」ことが子どもの発達と成長に果たす役割に異議を唱えることは極めて難しいと思います³。

その意味で、教師や親がほめ上手になることが大切であることは勿論ですが、子ども同士が上手にほめ合うことができるよう手助けをすることの大切さも忘れてはなりません。それは、ひいては日本の社会にほめ上手の大人が増えるということにつながり、そのことが日本社会にもたらす恩恵の大きさは計り知れません。小学校から英語という外国語によるコミュニケーションに慣れ親しむことが《生きる力》を育むために重要な役割を果たすという認識⁴に立

³ ほめることの役割に関する最新の知見を得るためには、キャロル・S・ドゥエック(2016)『マインドセット「やればできる!」の研究』草思社と、アンジェラ・ダックワース(2016)『やり抜く力 GRIT(グリット)—人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける』ダイヤモンド社 がとても参考になると思います。

⁴ 静岡県総合教育センターの「静岡県の授業づくり 外国語活動/外国語科『第2章 これからの外国語教育 1 外国語教育と「生きる力」』(2016年12月閲覧) 参照 http://www.center.shizuoka-c.ed.jp/shizuoka_guideline/05eigo/05-02-01.pdf

てば、日本語では恥ずかしくてなかなかできないけれども、英語でなら気軽にお互いをほめ合うことができる学習環境を創り出すことは、豊かに生きる力を持った社会人を育てるうえで極めて重要な意味を持っていると言えます。随分持って回った言い方になりましたが、そういう意味で、感嘆文という表現に習熟させることは大変意味のあることなのです。

それほど意味のある表現形式がなぜ教科書にほとんど登場しなくなってしまったのでしょうか。中学校で教えておられる読者の先生方に聞くのが一番早道かとは思いますが、私の憶測では、教える先生がたから「教えるににくい」という声がたくさん寄せられたからではないかと思っています。昔は、入試問題に、“very ...” という構造の文を “What a/an ...!” や “How ...!” という文に書き換えさせるという問題が多かったので、そのウォッシュバック効果（波及効果）で、試験問題と同じような順序で教えるのが一般的でした。疑問詞で始まるのになぜ主語と動詞の語順が平叙文のままなのかと、ここでつかかかってしまう生徒が多かったのではないのでしょうか。高校入試の定番問題になるくらいですから。しかし、こと口語英語に関する限り、主語と動詞までそろっておおまじになることはほとんどなく、“What a dress!” や “How wonderful!” で終わることがほとんどです。昔の先生たちはそのことに気がつかなかったのでしょうか。いや、そんなことはないはずです。でも、入試でそんな問題が出題されれば、ちゃんと主語と動詞のそろった完全文を言ったり書いたりできるようにしなければなりません。このような事態に悲鳴を上げる全国の声が教科書会社に届いたのではないかと思います。

試験のない小学校だからこそ感嘆文を！

中学校では高校入試の影響を排除することができません。でも、入試の影響を受けない公立の小・中学校であれば、簡単な口語的感嘆文に子どもたちを習熟させてあげることが比較的簡単にできます。その利点を生かさないとはいけません。

この連載シリーズの第5回の記事で、外国語を習い始めたばかりの学習者は、しばしば “naïve lexical hypothesis”（素朴語彙仮説）という仮説を無意識に

適用し、学習している言語の語彙と自分の母語の語彙との間には完全な1対1対応があると思いつく傾向があることを指摘しました。その理屈に従えば、英語を習い始めたばかりの初学者には、「感嘆文でなくても感嘆表現はできる」という方針に立って、「very ...」（とても～）とか “really ...”（本当に～）とかって言い方をすれば、驚くほど感動したことを伝えられるんだよ」と教えるより、“What”の意味は「何？」だということが何となくわかった時点で、“What a/an ...!” は「何て～なんだ！」という日本語の表現にピッタリなんだよと、1概念1形式の教え方をしてあげたほうが簡単だということになります。簡単だけではありません。既に述べた通り、相手に与える効果もより大きくなります。

まずは、“How...!” よりも “What a/an ...!”

感嘆文を教える場合、「<生徒の負担にならない程度に>」教えるという意味で、“How + 形容詞 [副詞]”の感嘆文は、文型としては簡単なものであり、しかも物事に対する感動を表現するには適切な表現であると思う⁵と、そんなふうに考える向きも多いかも知れません。でも、もっと「生徒の負担にならない」、簡単で、きわめて実用的な感嘆文があります。それは “What a/an ...!” という表現です。生徒たちの言語意識の中にある素朴語彙仮説に沿って「1形式」を選ぶなら、絶対にこれを選ぶべきです。なぜなら、“How ...!” と違って、感動の根拠となる属性（形容詞）に言及しなくて済むからです。カッコいい車を見ても、「カッコいい」が “cool” だと知っていなければ、“How cool!” とは言えません。でも、“What a/an ...!” 主義で行けば、“What a car!” だけで済むのです。実際に、日常英会話では、“What a...!” のように尻切れトンボで終わることもしょっちゅうです。映画やドラマを見ていると出てきます。

それでは、次に、小学校で言えそうな、形容詞の要らない、What で始まる簡単な感嘆文をいくつか挙げてみましょう。もちろん、a/an の後に簡単な形容詞をつけてもかまいませんが、いつもこの簡単な形を使って、この言い方一つでいろんな“感嘆”が

⁵ <http://www2.nkansai.ne.jp/users/ytaniguchi/kantanbun.htm>（2016年12月閲覧）

表現できるんだということを何度も繰り返し示してあげるのが一番効果的ではないかと思います。

ただ一つだけ**注意事項**があります。それは、何に驚いているのかを言わなくてもいい代わりに、文脈や言い方で、良い意味で驚いたという意味にも、あきれた！という否定的な驚きの意味にも解釈が可能な表現だということです。“What a/an ...!”を人について使う場合には**特に注意が必要**です。たとえば、赤ん坊じゃない大人に対して“**What a baby!**”と言えば、それは当然皮肉になりますね。でも、ほめるべき場面で使えば当然ほめことばとして受け取ってもらえます。それほど心配することはないでしょう。

[教室での授業で]

What a student! (生徒として何かすごいことをした子に)

What a boy! / What a girl! (男の子/女の子として何かすごいことをした子に)

What a baby! (①赤子のスーパーマンみたいにすごい赤ん坊について; ②赤ん坊のように大人げないことをする人に)

What a genius! (天才的な答えややり方を考えた子に)

What a speaker! (発表などがすごく上手だった子に)

What a presenter! (すごく上手なプレゼンをした子に)

What a helper! (すごく良くお手伝いをしてくれた子に)

What a question! (何かすごい質問をした子に)

What an answer! (何かすごい答えをした子に) (“an”が入ると発音しにくいけれど、米語発音だと[ワラネンサー])

What a guess! (すごい勘を働かせて正解した子に)

What a story! (すごいお話を書いた子に/読んだ後に)

What a video/movie! (すごいビデオ/映画を見た後に)

[音楽、図画工作、家庭科関連の話題で]

What a magic! (マジックの上手な子に) (何かをマジックのように上手にした子に)

What a piece of art! / What a work of art! (すごい折り紙作品など、すごく上手に作品を作った子に)

What a picture! (すごい絵を描いた/写真を撮った子に)

What an artist! (すごく上手な絵を描いた子に)

What a piano/violin/guitar player! (すごく上手にピアノ/バイオリン/ギターを弾く子に)

What a photo! (すごい写真を撮った/持っている子に)

What a cartoon! (すごい漫画を描いた子に)

What a singer / player! (すごく歌/楽器演奏の上手な子に)

[校外学習や郊外での活動に関連した話題で]

What a car! (通り去ったカッコいいスポーツカーを見て)

What a flower! (道端のすごく素敵な草花を見て)

What a tree! (威風堂々とした立派な木を見て)

What a day! (すごく良い天気の日や、何かすごく良いこと又は悪いことが(重なって)起こった日に)

What a sky! (見事に晴れ渡った空/すごく嫌な感じの空)

What a snowfall / storm / snow storm / rain / wind! (すごい雪/嵐/吹雪/雨/通り雨/風の中で)

What a view! (眼前に広がる海—“ocean”や“sea”—は、目に見える範囲しか見ておらず、その「海」の全体を見ているわけではないので、その「海」に対する評価はできません。だから、“**What an ocean!**”とか“**What a sea!**”という言い方は不自然。ただ、「海」を「海辺」とか「海岸」という意味で使っている場合は、海岸全体が視界に入るというのはごく自然のことなので、“**What a beach!**”という言い方も自然になります。)

What a sunrise / sunset! (修学旅行で見た日の出/日の入りが素晴らしくて)

[体育関連の話題で]

What a play! (ドッジボールなどですごいプレーをした子に)

What a shot! (バスケですごいシュートを決めた子に)

What a kick/pass/goal! (サッカー等ですごいキック/パス/得点を決めるシュートをした子に)

What a pitch / catch / throw / hit! (野球やソフトボールですごい投球/捕球/送球/打撃をした子に)

What a run! / What a runner! (足が速かった子に)

What a swim! / What a swimmer! (速く泳げた子に)

What a performance! (歌や踊りなどが上手だった子に)

What a pair! (靴、靴下、ズボン、手袋など、2つで1組のものをほめるときなら、いつでもこれ)

と、まあこんなふうには迷わず簡単に言えてしまうのです。「感嘆文」にするだけで簡単にインパクトのあるほめことばを言うことができるのに、それができない学生が増えているのはとても残念です。

子どもたちに教えるときには、人やものが「すごい」とき、そのびっくりした気持ちを伝えたかったら、**頭に藁(ワラ⇒What a)をかぶせろ**。まずはそう教えてみてはどうでしょう？車がすごくカッコよかったら、“car”の頭にワラをかぶせて、「ワラ car!」で出来上がり。綿(ワタ ⇒ What a)と言ってもダメではありませんが、日本語のタ行音よりラ行音の方が、英語で“**What a...!**”と言う時の舌の位置に近いので、カタカナを使っても、ちゃんとネイティブのような発音ができるようになります。それには、藁(ワラ)の方が良いのです。

それから、数えられない名詞についていう時も、原則通り、“**Wow! What news!**”のようにシンプルに

言えればいいだけです。

最後に、複数のものをほめるときも同じです。やはり原則通りで、“What”のあとに複数形を続けて、**What pants!** (何て生かすズボンなんだ!) や **What shoes!** (何て素敵な靴なの!) のように続けられたいだけです。が、複数形が続く場合だけは、“What”が「どんな」という意味の疑問詞と勘違いされてしまう恐れがあります。だからでしょう。そういう誤解を避けるために形容詞を加え、“**What adorable pants!**” や “**What cool shoes!**” のように言う方が普通です。この点で、複数の場合はちょっと面倒なようにも思えますが、前後関係があれば、形容詞をつけなくても勘違いされることはないでしょう。

形容詞語彙が増えれば “How...!” の方が簡単になる

“What a/an...!” で随分紙面を使ってしまいましたが、感動の根拠を表す形容詞がわかっているなら、確かにもう一つの “How” で始まる感嘆表現の方が簡単です。その場合、ほめるときは、**ハのウク** (歯の浮く) **言い方をしろ**。つまり、**ハウ (How) をつけろ**。こんどは、これが教え方のコツです。確かに “How + 形容詞!” の感嘆文は、「文型としては簡単なもの」なので、形容詞の語彙が増えるにつれて、この形の感嘆文も表現のバリエーションに難無く加えていくことができます。

さらにほめ方のバリエーションを増やすには…

このように “What a/an ...!” や “How” という感嘆文を加えるだけで、ほめ方に豊かさが増し加わります。オーストラリアで、眼前に広がる南太平洋の圧倒的に素晴らしい海の景色を目にしたとき、

1. Great!
2. How great!
3. What a...!
4. What a view! / What an ocean view!
5. What a great view!

と言えれば、“great”だけでも、それを核に4つの異なる表現ができるのです。ここでは、“view”という単語も言えなくてはいけないのですが…。

ところで、上の 1. のように、形容詞を一つ覚えて、その形容詞を感動的に言うだけでも勿論インパクトはあります。こういうのを “one word exclamation” (ワン・ワード・エクスクラメーション: 一語感嘆文) と言います。「ほめる」ための one word exclamation 用語彙を覚えておくと、確かに便利です。私がアメリカにいた時、テレビ番組でよく耳にしたからという理由でいつも教室で教えることにしているのは、アルファベット順で次の通りです。

Amazing!
Awesome !
Fabulous! (Fab!)
Fantastic!
Great!
Incredible!
Marvelous!
Stupendous!
Terrific!
Unbelievable!
Wonderful!
Wow!

Wow! と同類表現で、
①Oh, my goodness!
②Oh, my! ③My, my, my! など覚えておく
と便利です。でも、Oh, my god! はなるべく控
えましょう。「ほめる」場
合には良いのですが、「神
の名をみだりに唱えては
いけない」という信仰の
人たちには、それでも不
愉快に感じさせてしまう
かもしれないからです。

人によっては他にもまだまだ挙げられるでしょうけど、one word exclamation として私の頭に浮かんでくるのはこの程度です。ほめ方のバリエーションを増やそうと思って、「すごい!」という意味のこういう形容詞を沢山覚えようというのは誰も思いつくことだと思います。でも、個人的にはあまりお勧めできません。それには二つの理由があります。

形容詞を自然に使うのは難しい

まず一つ目の理由は、語彙にはネイティブではない我々にはなかなかわからない微妙なニュアンスの違いがあって、知らないうちに「えっ、それ微妙…」のような違和感を与えてしまうかもしれない場合があるからです。たとえば、上の 12 個の仲間 **Excellent! – Brilliant! – Outstanding!** の “三つ子” と “**Super!** – “**Superb!**” の “双子” がいます。三つ子の方は、どれも学校や職場では、日常とてもよく耳にする表現ですが、どれも教師や上司が誰かの成果物を評価するときのほめことばなので、何かを見

て感動するときの表現としては違和感があります。“Super!” や “Superb!” にも似たり寄ったりのニュアンスが伴います。評価対象ではない何かに対する純粋な感動を表す表現としては不自然です。勿論、ネイティブじゃない私たちが、こういうニュアンスの違いのことを気にし出したら切りがありません。知らぬが仏、サッと使ってシラッとすれば特段大きな問題はないと思います。でも、せっかく感動を表現しているのに、言われた人に「何だそりゃ」なんて思われて、せっかくの感動が相手に伝わらなかったら、あまりに残念です。そういうわけで、「すごい!」系の語彙を使いたいなら、使い慣れないものを辞書で漁って使うより、映画や現実のコミュニケーションの中で人が実際に使っているのを聞いたものを使うことの方がはるかに。

もう一つの理由は、one word exclamation 用の語彙だけに頼ると、失敗したら、それで終わりだからです。「失敗したら、それで終わり」とはどういうことかと言うと、その単語の発音が間違っただけで相手にいけば、何を言いたいのかが全く伝わりません。くみ取ってもらえればいいのですが、それに比べて、すでに述べたように、“What a...!” という文型は、それだけで感嘆文になるのです。“How...!” も同じ。感極まって、...の部分に入るべき言葉が出てこない。でも、この文型のゆえに、感動して言葉に詰まっているんだなと解釈してもらえるのです。そこが、文型としての感嘆文とただの語彙との最大の違いです。ただでさえコミュニケーションが失敗する原因があちこちにあるところから、誤解される可能性の少ない表現形式から覚えていく、教えていくのが効率的かつ効果的ではないでしょうか。

まとめ

先ほども引用した某ネット英語教師の先生が、同じ個所で次のように書いています。

しかし、“How + 形容詞 [副詞] !”の感嘆文は…
実際の使用頻度は低いとはいうものの、英語を理解する人でこの表現の意味を理解できない人はいないであろう。

このような観点から考えると、生徒たちに基本的な感嘆文を理解させることも、何らかの場面

役立つことがあるであろうと思われる。

(太字及び下線筆者)

この先生の認識には、太字及び下線の部分で二つの思い違いをしておられます。

第一に、既に述べたように口語における「実際の使用頻度 (が) 低い」のは、主語と動詞のそろった感嘆文です。主語と動詞の省略された構造の感嘆文は、日常生活の中で多用されています。

第二の間違いで、一つ目よりもさらに深刻な思い違いは、感嘆文が「何らかの場面で役立つことがあるであろう」程度の重要度の低い言語形式だと認識しておられる点です。かく言う私も、中学生として初めて感嘆文を習った時から、大学生になって、塾講師として入試問題に頻出する感嘆文を中学生に教えていた時に至るまで、何でこんな面倒くさいことをするんだろうと感じていたように思います。つまり、その当時の私には、感嘆文という表現形式が、誰かをほめて、喜ばせてあげるために使えるとても便利なコミュニケーション手段だという認識は全くなかったのです。むしろ、“very” を含む文から書き換える形の試験に登場する一言語形式でしかなかったのです。しかし、アメリカでの社会生活を通して、**誰かにことばをかけ、コミュニケーションを取ることは、その人に何らかの情報や意思を伝達するだけでなく、その人と良好な人間関係を築きたいという思いや気持ちを伝えるためでもあるのだ**ということに気づきました。付加疑問文や感嘆文が何度も使われるのを聞くうちに、それらの言語形式の大切な役割がわかってきたのです。日本にいと、圧倒的少数派の英語話者に対して「好かれなきゃ」と思う圧力は極めて小さく、そのために、「ほめる」という行動の大切さや、そのために感嘆文の果たす機能がいかにも有益かということにまで注意が回らなくなってしまうのかもしれない。

小学校の先生たちは、子どもたちを「ほめる」のがとても上手です。もし、大きくなるにつれて、このネット先生のように「ほめる」ことの大切さがこれほどまでに認識しづらいことになってしまうなら、何としても小さい頃から、しっかりとほめ方を学ばせ、日本語でも英語でも《ほめ上手》の子どもたちを育てる教育をしていただきたいと思います。

お知らせ

◆研究紀要の発行について

実用英語教育学会では研究紀要（年1回発行、査読付き、ISSN取得）を発行しております。内容については、学術的な実験・調査および理論的考察等をまとめた「研究論文」と、教育実践にもとづく知見を報告する「実践研究」の2部構成となっております。例年、締切は9月末日ですので、皆様の投稿をお待ちしております。

なお、投稿者資格として本学会の会員であることが規定されておりますので、まだ会員になられていない方は事前に入会手続きをお済ませくださいますようお願いいたします。

そのほかの詳しい投稿規定については、事務局までお問い合わせください。

◆研究大会について

新年2月18日に第6回研究大会を開催する予定です。研究や実践について発表する場でもありますが、学校種を問わず英語教育に日頃携わる方々と率直な意見交換のできる場をつくりたいと考えております。今度の研究大会は、2月19日～26日の日程で開催される2017冬季アジア札幌大会(2017 Sapporo Asian Winter Games)と重なっており、参加の難しい方もいらっしゃるかもしれませんが、ぜひご参加ください。テーマは、「ビジョン5-16：日本のグローバル化と英語教育の接点を探る—低年齢化するこれからの英語教育への指針」です。詳細はこちらから

⇒http://spelt.main.jp/information_kenkyutai_kai_2017.html

◆会員募集について

実用英語教育学会では、新会員を募集しております。年会費は4,000円です。会員の皆様は、研究会や大会の参加費が無料になるほか、口頭発表および論文発表の発表資格を得ることができます。



編集後記

『紀要』を何とか大晦日に発行できました。『SPELT Newsletter』との同時発行を予定していましたが、年を越してしまいました。研究会特集号のニューズレターを心待ちにしておられた皆様にはお詫びを申し上げます。小正月前、新春のおめでたい余韻が漂っているうちに発行できたことに免じて、何とぞご容赦ください。次回は、2月の研究大会の特集号です。3月以降の発行を予定しています。乞うご期待。これからも続けてご愛読くださることをお願いするとともに、皆様のご投稿もお待ちしております。『紀要』のような特別な投稿規定は一切ありません。ぜひお気軽に下のメールアドレスまでご投稿ください。コメント、エッセー、提案、相談、苦情、どんなテーマでも結構です。皆さんからのご便りをお待ちしております。

実用英語教育学会

編集：SPELT Newsletter 編集委員（石川希美・久野寛之・杉浦理恵）

発行：2017年1月11日

事務局：〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号

札幌大谷大学社会学部地域社会学科 石川希美 研究室内

TEL: 011-742-1969 (直) Fax: 011-742-1654 (代)

Email: info@spelt.main.jp ※◎を@に変更してください。